

優秀賞

「水を知る」という責任

清らかな水に恵まれた「富山」で育った私にとって、水は空気のように当たり前で、なくてはならない存在。私は、水について学ぼうと思いい、小学四年生から六年生まで「くろべ水の少年団」に所属し、地域の自然や水環境について学んできた。

「くろべ水の少年団」とは、黒部川や湧水群について調査活動を行う小学生の集まりだ。夏休み等を利用して、黒部川の上、中、下流のそれぞれの場所でも水質がどのように違うのかを調べた。調査では、水温を測ったり、水の流れの速さを調べたりする。「pH」や水の汚れ具合がわかる「COD」という数値も測った。私は三年間活動し、「子ども水博士号」の称号をいただいた。

少年団の活動で黒部川の上流を訪れたとき、透き通った水の中をサワガニが小石の間をゆったりと動いているのを間近で見ることができた。また、木々にはさまざまな鳥が集まり、まるで会話をするように鳴いていた。さらに山奥へ進むと、野生のサルの親子が穏やかに毛づくろいをしている姿もあった。その光景はとても静かで美しく、私は水こそがすべての命を支える「源」なのだと、体で感じた。

しかし、富山の水について学んでいくうちに、同じ富山県でありながら、神通川流域では、水が人の命を脅かす存在になっていたことを知り、大きな衝撃を受けた。

去年の春休み、家族とイタイイタイ病資料館を訪れた。そこで知ったのは、私が信じていた「恵みの水」とは全く違う現実だった。原因となったカドミウムは水に溶け込み、農作物を通して人の体に入り、少しずつ健康をむしばんでいた。展示されていた写真や記録から伝わる患者の方々の苦しみは想像以上で、胸が締めつけられた。骨がもろくなり、体を動かすだけで激しい痛みがはしる。その姿は、本来命を支えるはずの水が、人を傷つける存在になってしまった現実を強く

黒部市立清明中学校 二年 橋詰 翠咲

物語っていた。さらに心に残ったのは、原因が分からなかったことで起きた社会のゆがみである。当時この病気は「うつるもの」と誤解され、患者やその家族が差別を受けていたという。そして、人と人とのつながりが壊されていった。私は強く感じた。正しく知らないことが、人を傷つけてしまうことがあるのだと。そして、私は一つの考えにたどりついた。「知らないこと」は怖い。しかし、「知らないままではない命を守る」とさえてできないからだ。

今、私たちが蛇口をひねれば安全な水を使えるのは、決して当たり前ではない。原因を突き止めようと努力し、声を上げ続け、汚れた川や土地を元に戻そうとした多くの人たちの積み重ねがあったからこそ、今の暮らしが支えられているのだ。未知のことに不安を感じた時こそ、目をそらさずに知ろうとすること。それが同じ悲劇を繰り返さないために必要な姿勢だと思う。

水を守ることは、単に自然を守ることだけではない。人の健康や暮らし、人としての尊厳を守ることに繋がっている。私にできる小さな一歩は、今回学んだ知識を家族や友達に伝えていくこと。「水について考える」ということは、単に節水を意識することだけではない。水と人間がいかに深く関わっているかを正しく理解し、この豊かな環境を未来へと引き継いでいく使命感をもつことだ。かつて苦しい歴史を歩んだこの神通川で、いつか私たちが、大人になった時も、鮎が安心して暮らせるように。

私は「知ることの責任」を胸に、これからも「未知」を恐れず、水と共に学び続けていきたい。